## 2 自由度フレキシブル・マニピュレータの動的な位置と 力のハイブリッド制御<sup>†</sup>

松 野 文 俊\*・山 本 一 雄\*

## Dynamic Hybrid Position/Force Control of a Two-Degree-of-Freedom Flexible Manipulator

Fumitoshi MATSUNO\* and Kazuo YAMAMOTO\*

In this paper, a method is proposed whereby both contact force exerted by a flexible manipulator, and position of end-effector while in contact with a surface are controlled. We approximate elastic deformations by means of B-spline functions and derive dynamic equations of joint angles, vibration of the flexible link, and constraint force. A controller for the hybrid position/force control of the flexible manipulator is designed on the basis of the singular perturbation method. Simulation results are shown.

Key Words: flexible manipulator, dynamic hybrid position/force control, B-spline function, constraint force, singular perturbation method

#### 1. はじめに

これまでの産業用ロボットは十分な位置決め精度が得 られるようにリンク剛性を高くするというのが一般的で あった. ところが, 近年, 高速化・省エネルギの要求か ら軽量化が望まれるようになってきた.また宇宙空間で 作業するマニピュレータなどは打ち上げコストの面で軽 量化が必須となっている.マニピュレータを軽量化する とアームは必然的にフレキシブルなものとなり、弾性に よるたわみや振動が無視できなくなる。このようなマニ ピュレータを制御するには、アームの弾性によるたわみ や振動抑制を十分考慮しなければならなくなり、数多く の研究がなされてきた1)~6).また、ロボットに種々の作業 をさせる場合、より広範で高度な作業を遂行できるよう にするためにはロボットの手先効果器が対象物に与える 力を検知し制御することが必要である。宇宙空間におい て、スペース・ステーションのような大規模宇宙構造物 を宇宙ロボットを用いて構築する場合には、マニピュ

† IECON '91 で発表(1991・10)

\* 神戸大学工学部 神戸市灘区六甲台町 1-1

レータの位置と振動だけでなく対象物に与える力も制御 しなくてはならない。剛体マニピュレータの力と位置の ハイブリッド制御については数多く成果研究<sup>7)~9)</sup> が報告 されている。しかしながら,宇宙ロボットに代表される フレキシブル・マニピュレータの力制御の重要性は早く から指摘<sup>10)</sup> されているにもかかわらず,これに関する研 究はほとんどなされていない。最近になり,力制御され た2自由度フレキシブル・マニピュレータの線形近似モ デルに対して安定性を議論している報告<sup>11)</sup>と,2自由度 フレキシブル・マニピュレータの準静的な力と位置のハ イブリッド制御に関する報告<sup>12),13)</sup> が見られる程度であ る。

本論文では、環境に拘束された第2リンクが柔軟な2 自由度フレキシブル・マニピュレータのモデルを導出し、 力と位置のハイブリッド制御を実現するための動的な制 御器を提案する。まず、フレキシブル・リンクの弾性変 位を B-スプライン関数を用いて近似し、ラグランジュ乗 数法とラグランジュの運動方程式を用いて、リンクの関 節角、フレキシブル・リンクの振動と拘束力の関係を表 わす動特性方程式を導く。得られたモデルを Singular Perturbation 法<sup>6),14)</sup>を用いて Slow Subsystem と Fast Subsystem に分割し、Composite Control 則に基づいた 動的なハイブリッド制御器を構成する。最後に、シミュ

<sup>\*</sup> Faculty of Engineering, Kobe University, Kobe (Received August 17, 1992) (Revised November 30, 1992)

レーションを行い提案した制御器の有効性を検証する.

# 2. 環境に拘束された2自由度フレキシブル ・マニピュレータのモデリング

**Fig.1**に示すような環境に拘束された2自由度フレキ シブル・マニピュレータについて考える。マニピュレー タは第1リンクが剛体で第2リンクが柔軟であり、リン クi(i=1, 2)の長手方向に $x_i$ 軸を取るように座標系 $\Sigma_i$ を定める。また、O-XYを絶対座標系 $\Sigma_0$ とし、 $x_i, y_i$ 軸 の $\Sigma_0$ からみた単位ベクトルをそれぞれ $i_i, j_i$ とする。

本論文で用いる記号を以下のように定義する.

- **P**:マニピュレータの先端を Σ から見た位置ベク トル
- r:フレキシブル・リンク2の任意の点を ∑ から 見た位置ベクトル
- Q:拘束面からフレキシブル・リンク2の先端に働 く軸力
- M:フレキシブル・リンク2の先端の質量
- fn:拘束面から受ける力の大きさ
- n:接触点における拘束面の法線ベクトル
- $\theta_i(i=1,2)$ :リンク i の回転角
- *EI*:フレキシブル・リンク2の曲げ剛性
- J<sub>1</sub>: 剛体リンク1のΣ<sub>1</sub>の原点に関する慣性モーメ ント
- J<sub>2</sub>:モータ2のロータのΣ<sub>2</sub>の原点に関する慣性 モーメント
- *ρ*:フレキシブル・リンク2の線密度
- $L_i$ :リンクiの長さ
- *τi*:モータ *i* の発生トルク
- 座標系  $\Sigma_1$  と  $\Sigma_2$  の単位ベクトルは

$$i_1 = [\cos \theta_1, \sin \theta_1]^T, j_1 = [-\sin \theta_1, \cos \theta_1]^T,$$
  

$$i_2 = [\cos(\theta_1 + \theta_2), \sin(\theta_1 + \theta_2)]^T, \qquad (1)$$
  

$$j_2 = [-\sin(\theta_1 + \theta_2), \cos(\theta_1 + \theta_2)]^T$$



Fig. 1 Two-degree-of-freedom flexible manipulator

となる. 時刻 *t* で *i*<sub>2</sub> 軸上の位置 *r*(0≤*r*≤*L*<sub>2</sub>) における フレキシブル・リンク 2 の弾性変位 *u*(*t*, *r*) を

$$u(t, r) = \sum_{j=-1}^{N+1} a_j(t) B_j(r)$$
(2)

と近似する.ここで、 $B_j(r)$ は3次の B-スプライン関数

$$B_{j}(r) = \begin{cases} \frac{1}{6h^{3}}(r-h_{i-2})^{3}, & r \in [h_{j-2}, h_{j-1}] \\ \frac{1}{6h^{3}}(h^{3}+3h^{2}(r-h_{j-1}) \\ +3h(r-h_{j-1})^{2}-3(r-h_{j-1})^{3}\}, \\ r \in [h_{j-1}, h_{j}] \\ \frac{1}{6h^{3}}(h^{3}+3h^{2}(h_{j+1}-r) & (3) \\ +3h(h_{j+1}-r)^{2}-3(h_{j+1}-r)^{3}\}, \\ r \in [h_{j}, h_{j+1}] \\ \frac{1}{6h^{3}}(h_{j+2}-r)^{3}, & r \in [h_{j+1}, h_{j+2}] \\ \text{otherwise} & 0 \end{cases}$$

である.ただし、 $h = \frac{L_2}{N}, h_j = h_j$ で、NはB-スプライン 関数の刻み数である。また、リンク2の先端の弾性変位 を $u_{\mathcal{E}}(t) = u(t, L_2)$ とする。(1)式より、マニピュレータ 先端の位置ベクトル**P**とフレキシブル・リンク2の任意 の点を表わす位置ベクトル**r**は

$$P = L_{1}i_{1} + L_{2}i_{2} + u_{E}j_{2}$$

$$r = L_{1}i_{1} + ri_{2} + u(t, r)j_{2}$$
(4)  
となり、その時間微分は  

$$\dot{P} = L_{1}\dot{\theta}_{1}j_{1} + \{L_{2}(\dot{\theta}_{1} + \dot{\theta}_{2}) + \dot{u}_{E}\}j_{2} - u_{E}(\dot{\theta}_{1} + \dot{\theta}_{2})i_{2}$$

$$\dot{r} = L_{1}\dot{\theta}_{1}j_{1} + \{r(\dot{\theta}_{1} + \dot{\theta}_{2}) + \dot{u}(t, r)\}j_{2}$$

$$-u(t, r)(\dot{\theta}_{1} + \dot{\theta}_{2})i_{2}$$
となる.ここで、いは時間 t に関する微分である.  
さて、拘束面の方程式が  

$$\mathcal{O}(X, Y) = 0$$
(5)  
と表現できるとする.(1),(4)式より、マニピュレータ  
の先端の位置ベクトル(X\_{P}, Y\_{P})^{T} は

$$X_{p} = L_{1} \cos \theta_{1} + L_{2} \cos(\theta_{1} + \theta_{2}) - u_{E} \sin(\theta_{1} + \theta_{2})$$
$$Y_{p} = L_{1} \sin \theta_{1} + L_{2} \sin(\theta_{1} + \theta_{2}) + u_{E} \cos(\theta_{1} + \theta_{2})$$
(6)

となり、(6)式を用いると、拘束条件(5)式は  $\phi(\theta_1, \theta_2, u_E) = 0$  (7)

と表わすことができる.なお,環境とマニピュレータの 先端との間には摩擦はないものとする.

リンク2の境界条件を求めると,幾何学的境界条件は フレキシブル・リンク2の根元がモータ2のシャフトに 固定されていることより

u(t,0)=0, u'(t,0)=0 (8)
 となる.ただし, 'は空間 r に関する微分を表わす.また,フレキシブル・リンク2の先端におけるモーメント

松野・山本:2 自由度フレキシブル・マニピュレータの動的なハイブリッド制御

と力のつり合いに関する自然境界条件はそれぞれ

$$EIu_{E}^{\prime\prime}=0 \tag{9}$$

 $M \vec{P}^{T} j_{2} - E I u_{E}^{''} = Q u_{E}^{'} + \frac{\partial \phi}{\partial u_{E}} \lambda$ <sup>(10)</sup>

となる. この境界条件は厳密な偏微分方程式モデル<sup>12)</sup>の 境界条件と一致する.ここで、 $\lambda$ は拘束条件に対応するラ グランジュ乗数である. (9)式はフレキシブル・リンク 2の先端ではモーメントが働かないことを、(10)式は先 端に働く $j_2$ 方向の力のつり合いを表わしている. した がって(8)、(9)式より

$$a_{0}(t) = -\frac{B'_{-1}(0)B_{1}(0) - B_{-1}(0)B'_{1}(0)}{B'_{-1}(0)B_{0}(0) - B_{-1}(0)B'_{0}(0)}a_{1}(t)$$

$$a_{-1}(t) = -\frac{B'_{0}(0)B_{1}(0) - B_{0}(0)B'_{1}(0)}{B'_{0}(0)B_{-1}(0) - B_{0}(0)B'_{-1}(0)}a_{1}(t) \quad (11)$$

$$a_{N+1}(t) = -\frac{B''_{N-1}(L_{2})}{B''_{N+1}(L_{2})}a_{N-1}(t) - \frac{B''_{N}(L_{2})}{B''_{N+1}(L_{2})}a_{N}(t)$$

を得る.(10)式に(2)式と(4)式の **P**の定義を代入し, (11)式の最後の式を用いると

$$M_{2}\Big[(L_{1}\cos\theta_{1}+L_{2})\theta_{1}+L_{2}\theta_{2}+L_{1}\sin\theta_{2}\theta_{1}^{2} \\ +\Big\{B_{N-1}(L_{2})+B_{N+1}(L_{2})\frac{B_{N-1}'(L_{2})}{B_{N+1}'(L_{2})}\Big\} \\ \times \{\ddot{a}_{N-1}-a_{N-1}(\dot{\theta}_{1}+\dot{\theta}_{2})^{2}\} \\ +\Big\{B_{N}(L_{2})+B_{N+1}(L_{2})\frac{B_{N}'(L_{2})}{B_{N+1}'(L_{2})}\Big\} \\ \times \{\ddot{a}_{N}-a_{N}(\dot{\theta}_{1}+\dot{\theta}_{2})^{2}\}\Big] \\ -EI\Big[\Big\{B_{N-1}'(L_{2})+B_{N+1}'(L_{2})\frac{B_{N-1}'(L_{2})}{B_{N+1}'(L_{2})}\Big\}a_{N-1} \\ (12) \\ +\Big\{B_{N}''(L_{2})+B_{N+1}'(L_{2})\frac{B_{N}'(L_{2})}{B_{N-1}''(L_{2})}\Big\}a_{N}\Big]$$

$$= Q \bigg[ \bigg\{ B_{N-1}'(L_2) + B_{N+1}'(L_2) \frac{B_{N-1}'(L_2)}{B_{N+1}'(L_2)} \bigg\} a_{N-1} \\ + \bigg\{ B_{N}'(L_2) + B_{N+1}'(L_2) \frac{B_{N}'(L_2)}{B_{N+1}'(L_2)} \bigg\} a_N \bigg] + \frac{\partial \phi}{\partial u_E} \lambda$$

を得る。

Г

この系の運動エネルギ $\mathcal{T}$ ,位置エネルギ $\mathcal{V}$ および散 逸エネルギ $\mathcal{D}$ を求めると、

$$\mathcal{T} = \frac{1}{2} J_1 \dot{\theta}_1^2 + \frac{1}{2} J_2 (\dot{\theta}_1 + \dot{\theta}_2)^2 + \frac{1}{2} M \dot{\boldsymbol{P}}^T \dot{\boldsymbol{P}} + \frac{1}{2} \int_0^{L_2} \dot{\boldsymbol{r}}^T \dot{\boldsymbol{r}} \rho d\boldsymbol{r}$$
(13)

$$\mathcal{V} = \frac{1}{2} \int_{0}^{L_{2}} EI(u''(t, r))^{2} dr$$
$$-\frac{1}{2} \int_{0}^{L_{2}} Q(t)(u'(t, r))^{2} dr \qquad (14)$$

$$\mathcal{D} = \frac{1}{2} \int_0^{L_2} \delta(\dot{u}(t,r))^2 dr \tag{15}$$

となり、ラグランジュ関数は  $\mathcal{L}=\mathcal{T}-\mathcal{V}$  で与えられる. ここで  $\delta$  は内部減衰係数である.マニピュレータの先端

$$f_n \boldsymbol{n} = \lambda \begin{bmatrix} b(\theta_1, \theta_2, u_E) \\ c(\theta_1, \theta_2, u_E) \end{bmatrix}$$
(16)

と表現できる。ただし,

$$b(\theta_1, \theta_2, u_E) = \frac{\partial \phi}{\partial X}(\theta_1, \theta_2, u_E),$$
  
$$c(\theta_1, \theta_2, u_E) = \frac{\partial \phi}{\partial Y}(\theta_1, \theta_2, u_E)$$

である.また、軸力Qは $f_n n o - i_2$ 成分である<sup>15)</sup>から  $Q = -f_n i_n^T n$  (17)

となり、(1)、(16)、(17)式より  

$$Q = -\lambda \{ b(\theta_1, \theta_2, u_E) \cos(\theta_1 + \theta_2) + c(\theta_1, \theta_2, u_E) \sin(\theta_1 + \theta_2) \}$$
(18)

という関係式が成り立つ。

(13)~(15)式に(2),(11),(12),(18)式を用いると, ラグランジュの運動方程式よりモータ *i*(*i*=1,2)の回転 の方程式は

$$\frac{d}{dt}\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\theta}_{i}} - \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta_{i}} = \tau_{i} + \frac{\partial \phi}{\partial \theta_{i}} \lambda$$
(19)

で与えられ,振動の方程式は  

$$\frac{d}{dt}\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{a}_{j}} - \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{a}_{j}} + \frac{\partial \mathcal{D}}{\partial \dot{a}_{j}} = \frac{\partial \phi}{\partial a_{j}} \lambda, (j=1, \cdots, N-1)$$
(20)

となる。(19)式と(20),(12)式を合せて表現すれば  

$$\begin{bmatrix} M_{11}(\theta, a) & M_{12}(\theta, a) \\ M_{21}(\theta, a) & M_{22}(\theta, a) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \ddot{\theta} \\ \ddot{a} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f_1(\theta, \dot{\theta}, a) \\ f_2(\theta, \dot{\theta}, a) \end{bmatrix}$$

$$+ \lambda \begin{bmatrix} \frac{\partial \phi}{\partial \theta}(\theta) + h_1(\theta, a) \\ h_2(\theta, a) \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} g_1(\theta, \dot{\theta}, a, \dot{a}) \\ g_2(\theta, \dot{\theta}, a, \dot{a}) \end{bmatrix} (21)$$

$$+ EI \begin{bmatrix} o \\ Ka \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \tau \\ o \end{bmatrix}$$

という動特性方程式が得られる.ここで,

 $\boldsymbol{\theta} = [\theta_1, \theta_2]^T, \boldsymbol{a} = [a_1, \cdots, a_N]^T, \boldsymbol{\tau} = [\tau_1, \tau_2]^T$ 

である.また B-スプライン関数の性質より, K はバンド 幅が 7 の帯行列となる.

Chiouと Shahinpoor が力制御された 2 自由度マニ ピュレータの安定性の解析に用いたモデル<sup>11)</sup>は一端固 定他端自由の片もちばりの固有関数を基にしている.フ レキシブル・リンクの先端は拘束面に束縛されており自 由端とはみなせない。したがって,このモデルを用いて 安定性を議論することに疑問が生じる.本論文で提案し たモデル(21)式は,本質的には 3 次の内装関数を用いた 有限要素モデルであるが,これを用いることにより境界 からの拘束力や軸力の影響を考慮することができる.し たがって,(21)式はフレキシブル・マニピュレータが拘 束を受けている場合にも適用できるモデルである.

679

### 3. Singular Perturbation 法を用いた モデルの導出

前章で得られた動特性方程式(21)式は,各リンクの関 節変数とリンクの弾性変位の状態変数が互いに干渉した 複雑なシステムとなっている.(21)式は Singular Perturbation 法<sup>6),14)</sup> における Tikhonov の定理<sup>14)</sup> を満足し ており, Slow Subsystem(剛体マニピュレータの運動) と Fast Subsystem(弾性振動)に分割することができ る.一般に,拘束されたフレキシブル・リンクの振動周 波数は拘束されていない自由振動の周波数より高くな る.したがって,ある程度リンクの剛性が高く(*EI* が大 きい)比較的ゆっくりとした先端効果器の運動を想定す れば、リンクの関節角を遅いモード、フレキシブル・リ ンクの振動を速いモードとして考えることができる.

3.1 Slow Subsystem

$$\begin{bmatrix} M_{11} & M_{12} \\ M_{21} & M_{22} \end{bmatrix}^{-1} = \begin{bmatrix} H_{11} & H_{12} \\ H_{21} & H_{22} \end{bmatrix}$$
(22)

$$\boldsymbol{a} = \boldsymbol{\mu} \boldsymbol{K}^{-1} \boldsymbol{\xi}, \ \boldsymbol{\mu} = \frac{1}{EI} \tag{23}$$

とおく.(21)式の両辺に左から(22)式の行列をかけ,(23) 式を用いると,

$$\ddot{\boldsymbol{\theta}} = \boldsymbol{H}_{11}\boldsymbol{f}_1 + \boldsymbol{H}_{12}\boldsymbol{f}_2 + \left\{\boldsymbol{H}_{11}\left(\frac{\partial\phi}{\partial\boldsymbol{\theta}} + \boldsymbol{h}_1\right) + \boldsymbol{H}_{12}\boldsymbol{h}_2\right\}\boldsymbol{\lambda} \\ + \boldsymbol{H}_{11}\boldsymbol{g}_1 + \boldsymbol{H}_{12}\boldsymbol{g}_2 + \boldsymbol{H}_{12}\boldsymbol{\xi} + \boldsymbol{H}_{11}\boldsymbol{\tau}$$
(24)

$$\mu K^{-1} \dot{\boldsymbol{\xi}} = \boldsymbol{H}_{21} \boldsymbol{f}_1 + \boldsymbol{H}_{22} \boldsymbol{f}_2 + \left\{ \boldsymbol{H}_{21} \left( \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}} + \boldsymbol{h}_1 \right) + \boldsymbol{H}_{22} \boldsymbol{h}_2 \right\} \lambda + \boldsymbol{H}_{21} \boldsymbol{g}_1 + \boldsymbol{H}_{22} \boldsymbol{g}_2$$
(25)

$$+H_{22}\xi +H_{21}\tau$$

を得る. (25)式において  $\mu=0$  として **\$** について解くと,

$$\begin{split} \bar{\boldsymbol{\xi}} &= -\boldsymbol{H}_{22}^{-1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \Big[ \boldsymbol{H}_{21}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{f}_{1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, \boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \\ &+ \boldsymbol{H}_{22}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{f}_{2}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, \boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \\ &+ \Big\{ \boldsymbol{H}_{21}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \Big( \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) + \boldsymbol{h}_{1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \Big) \\ &+ \boldsymbol{H}_{22}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{h}_{2}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \Big\} \lambda \\ &+ \boldsymbol{H}_{21}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{g}_{1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, \boldsymbol{\bar{\theta}}, 0, 0) \\ &+ \boldsymbol{H}_{22}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{g}_{2}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, \boldsymbol{\bar{\theta}}, 0, 0) + \boldsymbol{H}_{21}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{\bar{\tau}} \Big] \end{split}$$
(26)

となる. ここで Slow Subsystem を表わすために状態変数に overbar をつけている.  $\bar{e}$  はある時刻でのフレキシ ブル・リンクの定常的な変形を表わしている. (24)式に おいて  $\mu=0$  として(26)式を代入し整理すると,

$$\begin{aligned} & \overleftarrow{\boldsymbol{\theta}} = \{ \boldsymbol{H}_{11}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) - \boldsymbol{H}_{12}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{H}_{22}^{-1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \boldsymbol{H}_{21}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \} \\ & \left\{ \boldsymbol{f}_{1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, \, \boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) + \boldsymbol{g}_{1}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, \, \boldsymbol{\bar{\theta}}, 0, 0) + \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}}(\boldsymbol{\bar{\theta}}, 0) \lambda + \boldsymbol{\bar{\tau}} \right\} \end{aligned}$$

$$(27)$$

となる.  $M_{\overline{11}}(\bar{\theta}, 0) = \{H_{11}(\bar{\theta}, 0) - H_{12}(\bar{\theta}, 0) H_{\overline{22}}(\bar{\theta}, 0) H_{\overline{22}}(\bar{\theta}, 0)\}, g_1(\bar{\theta}, \bar{\theta}, 0, 0) = 0$ であるので(27)式は

$$\boldsymbol{M}_{11}(\boldsymbol{\bar{\theta}},0)\boldsymbol{\dot{\theta}} = \boldsymbol{f}_{1}(\boldsymbol{\bar{\theta}},\boldsymbol{\dot{\theta}},0) + \frac{\partial\phi}{\partial\boldsymbol{\theta}}(\boldsymbol{\bar{\theta}},0)\lambda + \boldsymbol{\bar{\tau}} \quad (28)$$

となり、Slow Subsystem は剛体マニピュレータの運動 方程式と一致する.ここで、

$$X_{1} = \boldsymbol{\theta}, X_{2} = \boldsymbol{\theta}, \boldsymbol{z}_{1} = \boldsymbol{K}^{-1}\boldsymbol{\xi}, \boldsymbol{z}_{2} = \boldsymbol{\varepsilon}\boldsymbol{K}^{-1}\boldsymbol{\xi},$$
  
$$\boldsymbol{\varepsilon} = \sqrt{\mu}$$
(29)

とおく.

#### 3.2 Fast Subsystem

(29) 式の定義を用いて(24), (25) 式を書き直すと,  

$$\dot{X}_1 = X_2$$
  
 $\dot{X}_2 = H_{11}(X_1, \varepsilon^2 z_1) f_1(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1)$  (30)  
 $+ \{H_{12}(X_1, \varepsilon^2 z_1) f_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1) + h_1(X_1, \varepsilon^2 z_1))\}$   
 $+ H_{12}(X_1, \varepsilon^2 z_1) h_2(X_1, \varepsilon^2 z_1) + h_1(X_1, \varepsilon^2 z_1))$   
 $+ H_{12}(X_1, \varepsilon^2 z_1) h_2(X_1, \varepsilon^2 z_1) + h_1(X_1, \varepsilon^2 z_1))$   
 $+ H_{12}(X_1, \varepsilon^2 z_1) h_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1, \varepsilon z_2)$   
 $+ H_{12}(X_1, \varepsilon^2 z_1) g_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1, \varepsilon z_2)$   
 $+ H_{12}(X_1, \varepsilon^2 z_1) f_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1) \tau$   
 $\varepsilon \dot{z}_1 = z_2$   
 $\varepsilon \dot{z}_2 = H_{21}(X_1, \varepsilon^2 z_1) f_1(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1)$  (31)  
 $+ \{H_{21}(X_1, \varepsilon^2 z_1) f_2(X_1, \xi^2 z_1)\}$   
 $+ H_{22}(X_1, \varepsilon^2 z_1) h_2(X_1, \varepsilon^2 z_1)$   
 $+ h_1(X_1, \varepsilon^2 z_1) \int$   
 $+ H_{22}(X_1, \varepsilon^2 z_1) g_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1, \varepsilon z_2)$   
 $+ H_{22}(X_1, \varepsilon^2 z_1) g_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1, \varepsilon z_2)$   
 $+ H_{22}(X_1, \varepsilon^2 z_1) g_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1, \varepsilon z_2)$   
 $+ H_{22}(X_1, \varepsilon^2 z_1) g_2(X_1, X_2, \varepsilon^2 z_1, \varepsilon z_2)$   
 $+ H_{22}(X_1, \varepsilon^2 z_1) Kz_1 + H_{21}(X_1, \varepsilon^2 z_1)\tau$   
 $\varepsilon \dot{z} \delta$ ,  $\zeta \subset \mathcal{T}$ ,

$$s = \frac{t}{\varepsilon}, \ \overline{\xi} = K^{-1} \overline{\xi}$$
  
$$\eta_1 = z_1 - \overline{\xi}, \ \eta_2 = z_2$$
(32)

$$\frac{dX_1}{ds} = \varepsilon X_2$$

$$\frac{dX_2}{ds} = \varepsilon \Big[ H_{11}f_1 + H_{12}f_2 + \Big\{ H_{11}\Big(\frac{\partial\phi}{\partial\theta} + h_1\Big) + H_{12}h_2 \Big\} \lambda + H_{11}g_1 + H_{12}g_2 \qquad (33)$$

$$+ H_{12}(K\eta_1 + \bar{\xi}) + H_{11}\tau \Big]$$

となる.  $\epsilon \rightarrow 0$  なら  $\frac{dX_1}{ds} = 0, \frac{dX_2}{ds} = 0$  より  $X_1 = \text{const.},$  $X_2 = \text{const.}$  となり, Fast Subsystem において  $X_1, X_2$  は 定数であることがわかる. (32)式を用いると(31)式は,

$$\frac{d\boldsymbol{\eta}_1}{ds} = \boldsymbol{\eta}_2$$

$$\frac{d\boldsymbol{\eta}_2}{ds} = \frac{dt}{ds} \frac{d\boldsymbol{\eta}_2}{dt} = \varepsilon \boldsymbol{z}_2$$

$$= \boldsymbol{H}_{22}(\boldsymbol{\bar{X}}_1) \boldsymbol{K} \boldsymbol{\eta}_1 + \boldsymbol{H}_{21}(\boldsymbol{\bar{X}}_1) (\boldsymbol{\tau} - \boldsymbol{\bar{\tau}})$$
(34)

$$\frac{d\boldsymbol{\eta}_1}{ds} = \boldsymbol{\eta}_2$$

$$\frac{d\boldsymbol{\eta}_2}{ds} = \boldsymbol{H}_{22}(\bar{\boldsymbol{X}}_1)\boldsymbol{K}\boldsymbol{\eta}_1 + \boldsymbol{H}_{21}(\bar{\boldsymbol{X}}_1)(\boldsymbol{\tau} - \bar{\boldsymbol{\tau}}) \qquad (35)$$

となる.

#### 4. ハイブリッド制御器の構成

Slow Subsystem (28)式, Fast Subsystem (35)式に基 づいて Composite Control 則を導出する.

#### 4.1 Slow Subsystem の制御則

Slow Subsystem(28)式に McClamroch らの 動的な ハイブリッド制御則<sup>9)</sup>を用いる.(8)式に対応する拘束 条件

 $\phi(\theta_{l}, \theta_{2}, \bar{u}_{E})=0$  (36) に、サンプリングごとに直接計測された  $\bar{u}_{E}$ を用いるか、 (26)式に基づいて計算される  $\bar{\xi}$  に対し算出された  $\bar{u}_{E}$ を用いれば

$$\theta_2 = \mathcal{Q}(\theta_1) \tag{37}$$

と表現できるとする、ここで、

$$\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} \theta_{1} \\ \theta_{2} - \mathcal{Q}(\theta_{1}) \end{bmatrix}, \boldsymbol{\theta} = \begin{bmatrix} x_{1} \\ x_{2} + \mathcal{Q}(x_{1}) \end{bmatrix} = \boldsymbol{S}(\boldsymbol{x})$$
$$\boldsymbol{T}(\boldsymbol{x}) = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ \frac{\partial \mathcal{Q}}{\partial x_{1}}(x_{1}) & 1 \end{bmatrix} = \frac{\partial \boldsymbol{S}}{\partial \boldsymbol{x}} \qquad (38)$$

とおく。(38)式より

$$\dot{\boldsymbol{\theta}} = \boldsymbol{T}\dot{\boldsymbol{x}}, \ \ddot{\boldsymbol{\theta}} = \dot{\boldsymbol{T}}\dot{\boldsymbol{x}} + \boldsymbol{T}\ddot{\boldsymbol{x}}$$
(39)

であるので、(28)式をxを用いて書き直し、両辺の左から $T^{T}$ を掛けると

$$\boldsymbol{M}\boldsymbol{\ddot{x}} + \boldsymbol{F} = \boldsymbol{T}^{T} \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}} \boldsymbol{\lambda} + \boldsymbol{T}^{T} \boldsymbol{\bar{\tau}}$$

$$\tag{40}$$

となる.ここで,

 $M = T^{T}M_{11}T$ ,  $F = T^{T}(M_{11}\dot{T}\dot{x} - f_{1})$ である。(40)式に等価な式として,

$$\begin{bmatrix} \boldsymbol{E}_{1} \\ \boldsymbol{E}_{2} \end{bmatrix} \boldsymbol{M} \begin{bmatrix} \boldsymbol{E}_{1}^{T} \boldsymbol{E}_{2}^{T} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \ddot{\boldsymbol{x}}_{1} \\ \ddot{\boldsymbol{x}}_{2} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \boldsymbol{E}_{1} \\ \boldsymbol{E}_{2} \end{bmatrix} \boldsymbol{F}$$
$$= \begin{bmatrix} \boldsymbol{E}_{1} \\ \boldsymbol{E}_{2} \end{bmatrix} \boldsymbol{T}^{T} \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}} \lambda + \begin{bmatrix} \boldsymbol{E}_{1} \\ \boldsymbol{E}_{2} \end{bmatrix} \boldsymbol{T}^{T} \boldsymbol{\bar{\tau}}$$
(41)

を得る. ここで,

$$\begin{bmatrix} E_1^T E_2^T \end{bmatrix} = I_2, E_1 = \begin{bmatrix} 1 & 0 \end{bmatrix}, E_2 = \begin{bmatrix} 0 & 1 \end{bmatrix}$$
  
である。拘束条件から  $x_2 = 0$  であるので(41)式は  
 $E_1 M E_1^T \dot{x}_1 + E_1 F = E_1 T^T \bar{\tau}$  (42)

$$\boldsymbol{E}_{2}\boldsymbol{M}\boldsymbol{E}_{1}^{T}\ddot{\boldsymbol{x}}_{1} + \boldsymbol{E}_{2}\boldsymbol{F} = \boldsymbol{E}_{2}\boldsymbol{T}^{T}\frac{\partial\phi}{\partial\boldsymbol{\theta}}\boldsymbol{\lambda} + \boldsymbol{E}_{2}\boldsymbol{T}^{T}\boldsymbol{\bar{\tau}} \qquad (43)$$

となる.

さて、 $x_{1d} \in x_1, \lambda_d \in \lambda$ の目標値として Slow Subsystem の入力トルク  $\overline{r}$  を

$$\overline{\mathbf{r}} = (\mathbf{T}^{T})^{-1} \Big[ \mathbf{M} \mathbf{E}_{1}^{T} \{ \dot{x}_{1d} - K_{v} (\dot{x}_{1} - \dot{x}_{1d}) \\ - K_{p} (x_{1} - x_{1d}) \} + \mathbf{F} - \mathbf{T}^{T} \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}} \lambda_{d}$$
(44)  
$$+ \mathbf{E}_{2}^{T} K_{f} \mathbf{E}_{2} \mathbf{T}^{T} \frac{\partial \phi}{\partial \boldsymbol{\theta}} (\lambda - \lambda_{d}) \Big]$$

と定める.(44)式を(42),(43)式に代入すると,それぞれ  
$$E_1 M E_1^{T} \{ (\ddot{x}_1 - \ddot{x}_{1d}) + K_n (\dot{x}_1 - \dot{x}_{1d}) \}$$

$$+K_{p}(x_{1}-x_{1d}) = 0$$

$$E_{2}ME_{1}^{T}(\dot{x}_{1}-\dot{x}_{1d}) + K_{v}(\dot{x}_{1}-\dot{x}_{1d}) + K_{p}(x_{1}-\dot{x}_{1d}) + K_{v}(x_{1}-\dot{x}_{1d}) +$$

$$(46) = (1 + K_f) E_2 T^{T} \frac{\partial \phi}{\partial \theta} (\lambda - \lambda_d)$$

となり,  $K_v > 0, K_p > 0, K_f \neq -1$ と選べば  $x_1 \rightarrow x_{1d}(\theta_1 \rightarrow \theta_{1d}), \lambda = \lambda_d$ 

となる. (16)式より 
$$f_n = \lambda[bc]n$$
 であるので(47)

節角と拘束力が制御できることを意味している.

#### 4.2 Fast Subsystem の制御則

Fast Subsystem(35)式を行列表現すれば

$$\frac{d}{ds} \begin{bmatrix} \boldsymbol{p}_1 \\ \boldsymbol{p}_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & \boldsymbol{I} \\ \boldsymbol{H}_{22}(\bar{\boldsymbol{X}}_1)\boldsymbol{K} & \boldsymbol{0} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \boldsymbol{p}_1 \\ \boldsymbol{p}_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ \boldsymbol{H}_{21}(\bar{\boldsymbol{X}}_1) \end{bmatrix} (\boldsymbol{\tau} - \bar{\boldsymbol{\tau}})$$
(48)

となる、ここで,

とすれば(48)式は

 $u_f = F_f x_f$ 

$$\frac{d\boldsymbol{x}_f}{ds} = \boldsymbol{A}_f \boldsymbol{x}_f + \boldsymbol{B}_f \boldsymbol{u}_f \tag{49}$$

となる.よって状態フィードバック則

を用いれば(49)式の安定度を変えることができる.状態  $x_f$ は直接測定できないので状態観測器を構成する.スト レインゲージを振動センサとして用い,フレキシブル・ リンク2の状態を計測する.システムが可観測になるた めには,ストレインゲージ・センサの数 m は  $\left[\frac{N}{3} + \frac{2}{3}\right]$ 以 上必要となる. ストレインゲージの出力  $\tilde{y}$ は,

$$1 \le j < m$$
のとき センサの位置は  $r = (3j-1)h$   
 $\tilde{y}_{j} = EI\{B_{3j-2}^{"}((3j-1)h)a_{3j-2} + B_{3j-1}^{"}((3j-1)h)a_{3j-1}$  (51)

681

(47)

式は関

(20)

レ完美オス

となり

+
$$B''_{3'}((3j-1)h)a_{3j}$$
  
 $j=m$ のとき センサの位置は  $r=(N-1)h$   
 $\tilde{y}_m = EI\{B''_{N-2}((N-1)h)a_{N-2}$   
 $+B''_{N-1}((N-1)h)a_{N-1}$  (52)  
 $+B''_{N}((N-1)h)a_{N}\}$   
である、ここで(51)、(52)式より

$$\widetilde{\boldsymbol{y}} = [\widetilde{y}_1, \cdots, \widetilde{y}_m]^T = EIC\boldsymbol{a}$$
(53)

と定義する. (29), (32)式を用いると  
$$\tilde{y} = ElCa = Cz_1 = C(\eta_1 + K^{-1}\bar{\xi})$$
 (54)

$$\boldsymbol{y} = \boldsymbol{\tilde{y}} - \boldsymbol{C}\boldsymbol{K}^{-1}\,\boldsymbol{\bar{\xi}} \tag{55}$$

と置く.  $\tilde{y}$  は測定でき、 $\bar{\xi}$  は(26)式から測定値より計算 できるので y は測れることになる。出力方程式は

$$\boldsymbol{y} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{C} & \boldsymbol{0} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \boldsymbol{\eta}_1 \\ \boldsymbol{\eta}_2 \end{bmatrix} = \boldsymbol{C}_f \boldsymbol{x}_f \tag{56}$$

となる. (48), (56) 式に基づいて状態観測器

$$\frac{dz}{ds} = (\boldsymbol{A}_{f} - \boldsymbol{G}\boldsymbol{C}_{f})\boldsymbol{z} + \boldsymbol{B}_{f}\boldsymbol{u}_{f} + \boldsymbol{G}\boldsymbol{y}$$
(57)

を構成すれば推定値 z は任意の速さで状態 xf に収束す る. したがって, Fast Subsystem の入力は

$$\boldsymbol{u}_{f} = \boldsymbol{F}_{f} \boldsymbol{z} \tag{58}$$

となり、この入力によりフレキシブル・リンク2の振動 が抑制できることになる。

#### 4.3 Composite 制御則

Slow Subsystem の制御則(44)式と Fast Subsystem の制御則(58)式より、モータへの入力トルクは

$$\boldsymbol{\tau} = \boldsymbol{\bar{\tau}} + \boldsymbol{u}_f \tag{59}$$

となる.状態が直接観測できる場合には Tikhonov の定 理<sup>6),14)</sup>より, Full System の状態ベクトルは,

$$X_1 = \overline{X}_1 + O(\varepsilon), X_2 = \overline{X}_2 + O(\varepsilon)$$
 (60)

 $\boldsymbol{z}_1 = \boldsymbol{K}^{-1} \, \boldsymbol{\bar{\xi}} + \boldsymbol{\eta}_1 + O(\varepsilon), \, \boldsymbol{z}_2 = \boldsymbol{\eta}_2 + O(\varepsilon)$ 

により近似される。したがって、関節角、拘束力、フレ キシブル・リンクの振動が制御でき、位置と力のハイブ リッド制御が達成される.この制御器は剰余モードなど のモデル化誤差により生じるスピルオーバ現象に対して の安定性は保証されていない。また、状態観測器を用い た制御系なので安定性は必ずしも保証されないが、観測 器の状態推定の速度を Fast Subsystem の挙動より速く すれば目標が達成されることをシミュレーションにより 検証する.

#### 5. シミュレーション

拘束面を平面とし、拘束条件を直線 Y = aX + b(a)=-1, b=1)とする。その直線上を一定速度(8.5 cm/ sec])で移動しながら直線の垂直方向に一定の力(fnd =2.0[N])を与える場合のシミュレーションを行った.

この場合の拘束条件は  

$$L_{1} \sin \theta_{1} + L_{2} \sin(\theta_{1} + \theta_{2}) + u_{E} \cos(\theta_{1} + \theta_{2})$$
  
 $-a\{L_{1} \cos \theta_{1} + L_{2} \cos(\theta_{1} + \theta_{2})$   
 $-u_{E} \sin(\theta_{1} + \theta_{2})\} - b = 0$  (61)  
となり、(61)式より  
 $\theta_{2} = \Omega(\theta_{1})$ 

$$=\pi - \sin^{-1} \frac{1}{\sqrt{(L_2 + a\bar{u}_E)^2 + (\bar{u}_E - aL_2)^2}}$$
(62)  
$$-\theta_1 - \tan^{-1} \frac{\bar{u}_E - aL_2}{L_2 + a\bar{u}_E}$$

となる. 各物理定数は  $L_1=1.2[m]$ ,  $L_2=2.0[m]$ , EI  $=200[\text{kgm}^2], \ \rho=1.0[\text{kg/m}], \ J_1=1[\text{kgm}^2], \ J_2=0.1$ [kgm<sup>2</sup>], M=0.5 [kg],  $\delta=0$  [kg/s] とした. シミュ レーション・モデルとしてフレキシブル・リンクの刻み 数を N=12 とした. また, 制御系設計において N=6 と したのでストレインゲージ・センサを r=2h と r=5h の2カ所に取り付ければシステムは可観測になる。オブ ザーバのゲインは Fast Subsystem の挙動より状態推定 が速く収束するように、その極が-9.5-0.5 k(k=1,…、 12)となるように定めた、Slow Subsystem に対する フィードバックゲインを $K_v=5, K_p=50, K_f=0.6$ とし た. Fast Subsystem のシステム行列は関節角により変 化するが、フレキシブル・マニピュレータの運動する範 囲の中から  $\theta_1=1.44$ [rad],  $\theta_2=-1.99$ [rad]と選び固定 することによって, Fast Subsystem の制御器を構成し た.また,関節角の目標値は絶対座標系におけるマニピュ レータの先端の目標値  $(X_d, Y_d)^r$  とサンプリングごとに 計測される ug の値から(6)式の関係を用い,通常の逆 運動学としてオンラインで求めた.

Slow Subsystem のみを考慮した、すなわち、剛体マ ニピュレータとして制御した場合の応答(Slow Control)を Fig.2に、提案した Composite 制御則を用いた 場合の応答(Composite Control)を **Fig.3**に示す.また.







Fig. 3 Transient responses (composite control)



Fig. 4 Transient responses with initial position errors (slow control)

マニピュレータの先端の初期値を拘束面上で約0.1[m] ずらした場合についても同様なシミュレーションを行 い,その結果を Fig.4(Slow Control), Fig.5(Composite Control)に示す.図において点線は目標値を,実線は それぞれの状態の応答を示している.なお,制御器は離 散時間系で設計し,そのサンプリングタイムを2[ms]と した.また,Fig.6に拘束面上を移動するマニピュレータ の姿勢を示す.

Full System に対して Slow Control 則を用いると, Fig.2,4より,フレキシブル・リンク2の関節角 & の応 答に振動の影響が大きく現れているのがわかる.このた め,剛体リンク1の関節角 & の応答にも影響が現れてい る.力の応答も振動の影響により目標値に収束しない. 一方,Full System に対して Composite Control 則を用 いた場合には,Fig.3,5より剛体リンク1およびフレキ シブル・リンク2の関節角の応答から振動の影響が補償 されていることがわかる.これらのことから環境に拘束



Fig. 5 Transient responses with initial position errors (composite control)



Fig. 6 Manipulator configurations

された2自由度フレキシブル・マニピュレータに対して 提案した動的な力と位置のハイブリッド制御器が有効に 働くことが検証された。

#### 6. おわりに

本論文では、環境に拘束された2自由度フレキシブ ル・マニピュレータの動的な力と位置のハイブリッド制 御について考察を行った.まず,フレキシブル・マニピュ レータの動特性方程式を,B-スプライン関数,ラグラン ジュ乗数法とラグランジュの運動方程式を用いることに より導出した。この動特性方程式はフレキシブル・リン クの境界条件が反映されており,力と位置のハイブリッ ド制御に適用できる。導出された動特性方程式を Singular Perturbation 法によりモータ系と振動系の二つのサ ブシステムに分割し, Composite Control 則を用い, Full System を安定化する制御入力を求めた。シミュレー ションにより提案した制御器を用いれば、フレキシブ ル・リンクの弾性振動が抑えられ力と位置がうまく制御 できることを確認した. Fast Subsystem のシステム行 列は関節角により変化するが、本論文では適当な値に固 定し Fast Subsystem の制御器を構成した.マニピュ レータの動作範囲をもっと大きくする場合には、ロバス トな制御器を構成する必要があるだろう。

今後の課題としては、n自由度フレキシブル・マニピュ レータのモデリングと、ハイブリッド制御器の構成、環 境による拘束が数式として表わせない場合や、拘束面と の摩擦が無視できない場合への対応、双腕フレキシブ ル・アームによる協調制御への拡張などが挙げられる.

最後に、日頃よりご指導いただいている神戸大学工学 部池田雅夫教授と大阪大学基礎工学部坂和愛幸教授に謝 意を表する。

#### 参考文献

- 内山, ほか:フレキシブルアーム特集号, 日本ロボット学 会誌, 6-5, 415/467 (1988)
- 2) 嘉納秀明:集中と分布(IV)-近似モデリングの方法,計測 と制御,26-11,968/970 (1987)
- R. P. Judd and D. R. Falkenburg: Dynamics of Nonrigid Articulated Robot Linkages, IEEE Transactions on Automatic Control, AC-30-5, 499/502 (1985)
- K. H. Low: A Systematic Formulation of Dynamic Equations for Robot Manipulators with Elastic Links, Journal of Robotic Systems, 4-3, 435/456 (1987)
- F. Matsuno and Y. Sakawa : A Simple Model of Flexible Manipulators with Six Axes and Vibration Control by Using Accelerometers, Journal of Robotic Systems, 7-4, 575/597 (1990)
- B. Siciliano and W. J. Book : A Singular Perturbation Approach to Control of Lightweight Flexible Manipulators, International Journal of Robotics Research, 7 -4, 79/90 (1988)
- M. H. Raibert and J. J. Craig : Hybrid Position/Force Control of Manipulators, Transactions of the ASME Journal of Dynamic Systems, Measurement, and Control, 103-2, 126/133 (1981)
- T. Yoshikawa : Dynamic Hybrid Position/Force Control of Robot Manipulators Description of Hand Constrains and Calculation of Joint Driving Force, IEEE Transactions on Robotics and Automation, RA-3-5, 386/392 (1987)
- 9) N. H. McClamroch and D. Wang : Feedback Stabilization and Tracking of Constrained Robots, IEEE Trans., AC-33-5, 419/426 (1988)
- T. Fukuda: Flexibility Control of Elastic Robotic Arms, Journal of Robotic Systems, 2-1, 73/88 (1985)
- 11) B. C. Chiou and M. Shahinpoor: Dynamic Stability

Analysis of a Two-Link Force-Controlled Flexible Manipulator, Transactions of the ASME Journal of Dynamic Systems, Measurement, and Control, **112**, 661/666 (1990)

- 12) F. Matsuno, Y. Sakawa and T. Asano: Quasi-Static Hybrid Position/Force Control of a Flexible Manipulator, Proceeding of IEEE International Conference on Robotics and Automation, 3, 2838/2842 (1991)
- 13) 松野,ほか:2自由度フレキシブル・マニピュレータの位置と力の準静的なハイブリッド制御,システム制御情報学会論文誌,5-4,155/163 (1992)
- P. V. Kokotovic: Applications of Singular Perturbation Techniques to Control Problems, SIAM Review, 26-4, 500/550 (1984)
- L. Meirovitch: Analytical Methods in Vibrations, MacMillan (1967)

「著 者 紹 介]

#### 松野)文俊(正会員)



1986年、大阪大学大学院基礎工学研究科 博士課程修了.同年大阪大学基礎工学部助 手(制御工学).91年神戸大学工学部講師 (システム工学),92年より同助教授(情報 知能工学)となり,現在に至る.主に,ロボッ ト・大型宇宙構造物の制御,分布定数系の制 御に関する研究に従事.日本ロボット学会, システム制御情報学会などの会員(工学博 士).

山本一雄



1992年神戸大学工学部システム工学科 卒業.同年神戸大学大学院工学研究科修士 課程(システム工学)入学.現在在学中,主 として,フレキシブル・アームの研究に取 り組む.日本ロボット学会の会員.